

28 老人に対する学生の意識調査

—老人の実態調査予報として—

福島大学芸 岡村 益

1 寿命の延長という事実の半面、新旧思想の対立、生活の厳しさに伴う扶養問題と現行法に対する誤解や批判の絡み合い、姑嫁の関係等老人問題は複雑である。家庭における老人の生活を実証的に研究し家族関係処理及び老人の位座の安定のための資料を得ることを目的として、まず若い世代の老人に対する考え方を調査した。

2 質問紙法により、福島県下大学生及び高校生 1000 名を対象とし、性別・老人と同居の経験の有無別・学校種別・地域別等の条件による変化をみた。

3 現代学生の意識の一端を知ると共に、老人は若い世代をどう理解し導くべきかについて示唆を得た。学生は、従来の敬老思想を批判しつつも真の敬老の意義を認め老人の美点に敬意を抱き、社会保障による福祉のほか老人の職業を説くなど、男女・学校により傾向差はあるが概して穏健である。その集約的な表われとして、家庭に老人がいた方がよいという意見が約 60% で大阪市調査 (1951年) 結果と近似する。これは老人同居率の 2 倍以上を占め、また同居率の高い地域では高率である故、これら地域の実態の分析結果も期待できよう。女子のこの意見支持率の高さと嫁姑問題は一見矛盾するが、それに対する予測も得た。一方県下の穩居慣行分布も若干明らかになった。以上この研究の所期の目的及び予備調査としての意義の過半を果したかと思う。なお、老人の生活及び扶養の実態調査も併せて実施継続中である。